

令和4年度第30回全国高等学校生徒商業研究発表大会
審査委員長講評

令和4年11月17日

皆さん、お疲れ様でした。はじめに、感染対策や活動の制限など学校現場の負担は増える中、学びを止めることなく工夫しながら取り組む先生方、生徒の皆さんに、審査委員一同、深く敬意を表します。

近年は「商品開発による地域活性化」に関する研究が多く、今年度は「食品ロス」に着目した研究が複数ありました。また、地域により活動の制限に違いはありますが、徐々にコロナ前の研究に近づいてきた様子が見られました。

さて、今回の研究はこれで終わりではなく、これまでの活動を振り返り、また他校の研究を参考にしながら、次に繋げることが大切です。

そこで、今後の研究を進める上で、お願いしたい点を3点お話します。

1点目は「仮説の設定」についてです。研究には必ず仮説が必要で、この仮説がなければ単なる実践報告となってしまいます。現状を十分に分析し、客観的な事実やデータといった確かな根拠に基づいて、仮説を設定する必要があります。

このことは検証についても同様で、自己評価での到達度ではなく、客観的な視点での評価の方が質の高い研究と判断されます。外部の評価を取り入れるなどの工夫をされている学校も多くみられ、研究の質の高さを感じました。

皆さんには、それぞれが設定した課題の解決に向けて今後も「ストーリー性」をもった研究を進めてほしいと思います。

今回、気が付いた点として、単年での研究にとどまらず、数年間にわたる研究のうちの今年度の研究について報告していただいた学校も多く見られました。継続研究については、今後の研究予定も踏まえみさせていただきました。

また、取材や新聞掲載等のマスメディアに取り上げられたことを報告書や発表に盛り込んでいる例がありますが、都市部と地方では取材等の機会にも違いがありますので、取り上げられたことが評価の対象ではなく、取り上げられたことによって今研究にどのような影響（効果）があったかが重要であると考えています。

2点目は「報告書」についてです。今回の報告書で少し気になった点として、A4レポートの左右の余白に章などの記載をしている学校がありますが、研究報告書は冊子での配布ではないため、左右の余白への記載は不要で加点の対象にはなっておりません。

また、フォントやページ構成等により読みやすい報告書がある一方で、色使いや写真やグラフ等の分量が多すぎて、バランスに欠ける報告書もありました。

各校には、限られた時間の中で報告書を作成・提出していただいているわけですが、報告書の「信頼性」を高めるためにも誤字や脱字を含め、今回の報告書を点検し、さらに仕上げて、次の研究に進んでいただきたいと思います。

3点目は「発表」についてです。「伝える」という言葉と「伝わる」という言葉は当然のことながら違います。自分が言いたいことだけを伝えるのでは本当のプレゼンテーションとは言えません。「伝わる」ために必要なこと、相手が分かる言葉を使い、相手の立場になって、その気持ちを想像するといった視点をもって発表してほしいと思います。

結びに、3年ぶりに全国からひとつの会場に集まり全国大会が開催されたことで、モニター越しでは伝わらない臨場感や雰囲気を感じていただいたことと思います。

是非、他校の研究を参考にし、より一層、各地域の課題解決に取り組んでいただきたいと思います。簡単ですが、以上で講評を終わります。有難うございました。